

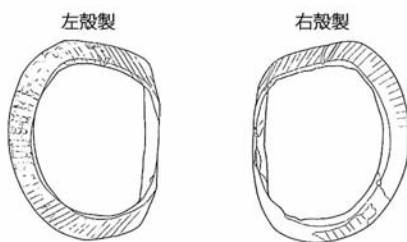
長崎市深堀遺跡におけるフネガイ科製貝輪について

土岐 耕司

はじめに

平成13年度に実施され、筆者も調査員として従事した長崎市深堀遺跡の発掘調査において、貝輪を着装した人骨を伴う弥生時代の土壌墓2基を検出した。このうち第10号土壌墓の被葬者の右手首には、いわゆる「南海産貝輪」であるイモガイ製ヨコ型組み合わせ式貝輪が装着されていた（阿部他 2004）。北海道伊達市有珠モシリ遺跡においても装着例が知られ、いわゆる「貝の道」に関わる貴重な検出事例であった（註1）。

幸いにも、筆者はその整理作業にも従事できたのであるが、その際、長崎市教委の担当者として作業に携わっていた立石明氏によって、第10号土壌墓の被葬者が装着するフネガイ科製貝輪について、大変興味深い発見がなされた。平行四辺形気味の箱形を呈するフネガイ科の貝は、左右殻の区別が容易な貝種である（第1図）が、同被葬者は右腕に左殻製のみを6点、左腕に右殻製のみ9点を通してあり、その他左腕付近に置かれていたものも5点が右殻製のみであった（註2）。



第1図 フネガイ科製貝輪の左右

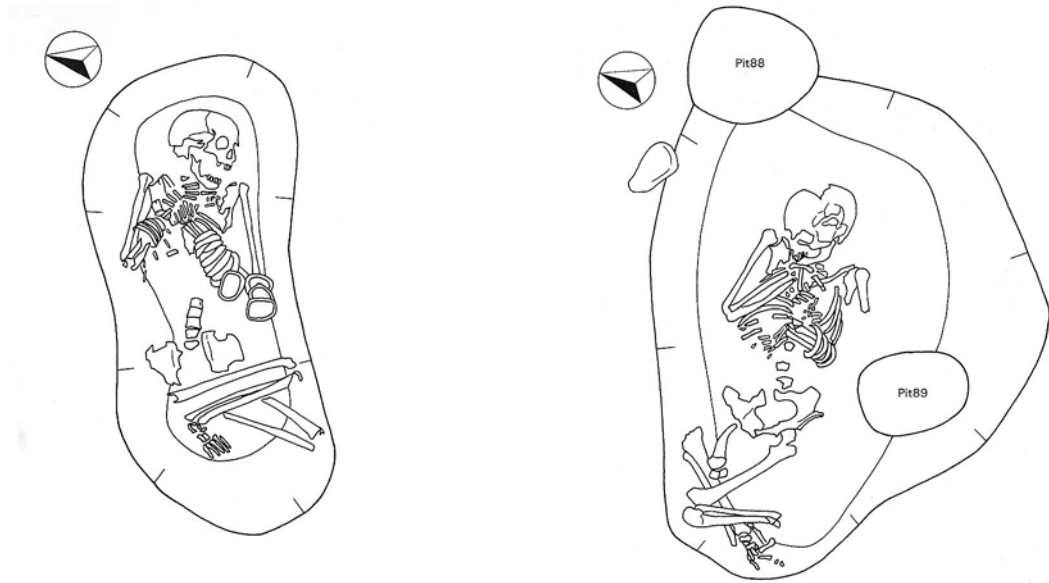
これまで「貝輪装着に関する左右の意識」について、「南島産貝輪」の男女による装着部位に着目した研究は大いになされているが、縄文時代から製作されてきた「在来種」であるフネガイ科貝輪にも、「左右対称」の美意識と受け取れるような装着事例が明らかになったことは、今後の研究において一つの分類要素となり得るものと確信する。

このことがあってから、筆者は二枚貝製貝輪、特に左右殻区別の容易なフネガイ科製貝輪に思いを到らすようになった。木下尚子氏の論考によると、九州で最も早く南海産貝輪が登場するのが西北九州沿岸部であり、その流入に大きな役割をはたしていたのが、この地域の海人であったという。縄文的貝輪装着習俗を基層に、南島の貝輪と北部九州の貝輪の装着習俗を加えて、この地域特有の複雑な装着習俗を作り上げたとする（木下 1996）。つまり西北九州の海人たちは、現地産種製貝輪に固執しながらも南海産種製貝輪をも取り入れながら、その美意識や価値観を発展させていった、と言い換えることができよう。

本稿においては、在来種とされ、左右の区別が容易でもある「フネガイ科製貝輪」について、事実確認・整理することを目的とする。貝輪に限らず装身具装着にあたっては、その素材の希少性が少なからず問題となる。在来種と一括されるフネガイ科貝類は、その獲得が重労働なのかどうか、また西北九州において何故にフネガイ科貝類が多用されるのか、答えを出すことは簡単ではないが、筆者なりのアプローチで迫ってみたい。

1. 平成13年度深堀遺跡J地区の調査成果

冒頭で述べたように、深堀遺跡では貝輪装着人骨を伴う弥生時代の土壌墓を検出した。上位層に包含される遺物や人骨の年代測定から、弥生時代前～中期のものと思われる（註3）。まずはこれらの遺構について紹介しておく（第2図）。



第2図 第10号土壌墓(左)と第11号土壌墓(右)(S = 1/20)

(1) 第10号土壌墓

壮年女性の全身骨格を検出した。緩やかな屈肢状態を呈していた。骨格より上位ではベンガラとみられる施朱がなされており、過去の調査を含めた深堀遺跡での土壌墓としては初例である(石棺墓への施朱は2例あり)。着装・副葬品は以下の通りである(第3図)。

イモガイ製有孔貝輪1組4点：右手首に装着。

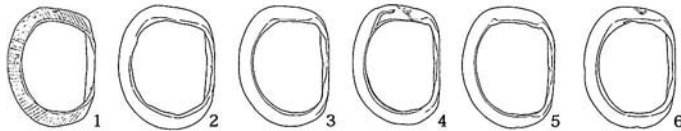
フネガイ科(左殻)製環状貝輪6点：全て右前腕に装着。

フネガイ科(右殻)製環状貝輪14点：9点を左前腕に装着。5点を左ひじ付近に置く。

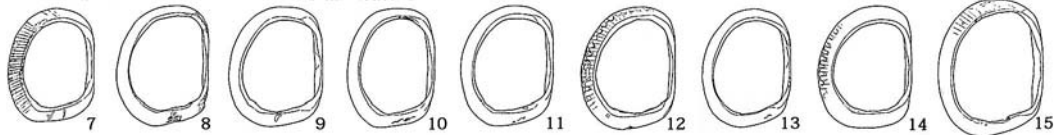
碧玉製管玉2点

管状骨製品(骨製管玉?)8点

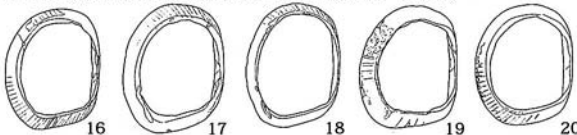
1~6：右腕に通されていたフネガイ科製貝輪(左殻製)



7~15：左腕に通されていたフネガイ科製貝輪(右殻製)



16~20：左腕付近に置かれていたフネガイ科製貝輪(右殻製)



21~24：右手首に通されていたイモガイ製ヨコ型貝輪



第3図 第10号土壌墓被葬者の着装貝輪(S = 1/5)

(2) 第11号土墳墓

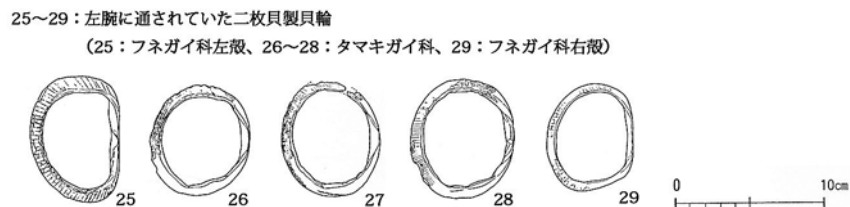
熟年女性の全身骨格を検出した。緩やかな屈肢状態を呈していた。施朱の痕跡は認められない。着装品は以下の通りである（第4図）。

フネガイ科（左殻）製環状貝輪 1点：左前腕に装着。5点の貝輪中，最も手首側。

フネガイ科（右殻）製環状貝輪 1点：左前腕に装着。5点の貝輪中，最もひじ側。

タマキガイ科製環状貝輪 3点：左前腕に装着。上記2点の貝輪に挟まれる。

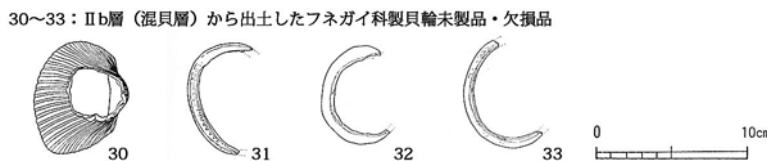
碧玉製管玉12点



第4図 第11号土墳墓被葬者の着装貝輪（S = 1 / 5）

(3) 遺構外出土貝輪

18点が確認されている。全て未製品或いは欠損品であり，また二枚貝製である。18点中12点が弥生時代の遺物包含層（混貝層）からの出土。報告書に図示掲載された4点（第5図）も混貝層の出土で，加藤久雄氏による同定の結果，全てフネガイ科製である。



第5図 深堀遺跡遺構外出土貝輪（S = 1 / 5）

2．弥生時代におけるフネガイ科製貝輪

縄文時代には九州各地域でみられた二枚貝製貝輪であるが，弥生時代になると南海産貝輪の流入もあってか，伝統的貝輪の使用分布に変化がみられるようになる。木下氏論考からの引用となるが，九州及びその近辺地域と素材貝類との使用関係を表1にまとめた。

表1 九州及びその近辺地域における貝輪素材

地域	ゴホウラ	イモガイ	オオツタノハ	ユキノカサ	マツバガイ	アカニシ	タマキガイ科	フネガイ科	ハイガイ
福岡平野									
三養基・神埼									
朝倉・筑後									
肥後・薩摩									
遠賀川流域									
西北九州沿岸部									
長門北浦・出雲									
瀬戸内海沿岸									

このように弥生時代になると，フネガイ科製貝輪は，瀬戸内沿岸平野で僅かに認められる以外は，ほぼ西北九州，特に長崎県内での使用に限られている。この西北九州での過去の出土例について，これも木下氏論考からの引用であるが，若干筆者が追加・修正したものを表2に示している。

表2 西北九州における二枚貝製貝輪の着装事例

遺跡名	市町村	識別番号	遺構種別	貝輪数	着装者	右	左	備考
芦ヶ浦 第一洞穴	対馬市			1				
根獅子 診療所前	平戸市		石棺墓	6	不明	両腕	6	タマキガイ科混在
			石棺墓	約6	不明	着装		タマキガイ科混在
		5号	石棺墓	29	女性?	12	17	6着装, タマキガイ科混在
		7号	土壇墓か	2	女性	2		
宮の本	佐世保市	23号	土壇墓	1	女性	0	1	
		24号	土壇墓	3	女性	0	3	タマキガイ科混在
浜郷	新上五島町	1次17号	土壇墓	2	女性	0	2	
		2次1号	土壇墓	25	女性	16	9	タマキガイ科混在
大浜	五島市		甕棺墓	16	小児以下			タマキガイ科混在
		3号(1964)	人骨	5	女性	5		ベンケイガイ
		7号(1964)	人骨	4	女性	1	3	ベンケイガイ
		1号(1998)	配石墓	3	不明			フネガイ科1, タマキガイ科2か
		2号(1998)	配石墓	2	不明	2		ベンケイガイ
小佐古 石棺墓群	大村市	10号	石棺墓	7 (最小5)	3体合葬	5	7	タマキガイ科?
深堀	長崎市	2号(1967)	石棺墓	28	女性	12	12	
		17号(1967)	土壇墓	22	女性	7	15	タマキガイ科混在
		18号(1967)	土壇墓	20	小児以下	9	11	タマキガイ科混在
		19号(1967)	土壇墓	5	女性	5	0	タマキガイ科混在
		10号(2004)	土壇墓	20+4	女性	6	9	左肘上にあと5点(以上フネガイ科) イモガイ製ヨコ型貝輪も着装
		11号(2004)	土壇墓	5	女性		5	フネガイ科2, タマキガイ科3

3. 考古学におけるフネガイ科の貝類について

ここまで「フネガイ科」という語を多用してきたが、本稿において考察の対象とする貝種について定義したい。

フネガイ科製の貝輪素材の分析を行った忍澤成規氏は、3種の貝(サルボウガイ・アカガイ・サトウガイ)を分析対象とし、考古学におけるフネガイ科貝類の同定の歴史と現状にも触れている(忍澤2005)。その中で、

- (1) かつてマルサルボウと分類されていたものは、現在は分類学上サトウガイと同種とされている。
- (2) 昭和初期には比較的厳密に分類されていたフネガイ科貝類であったが、徐々に安易な同定がなされるようになり、特にサトウガイと同定されるものが激減した。

といった事象を提示している。いずれも、本科貝類同定に関して重要な問題である。

前述の深堀遺跡報告書での取り扱い、本文中では全て「フネガイ科」という語を使用するに留まった。しかし、付章である自然科学分析の動物遺存体の項においては、貝類同定者である加藤久雄氏により「アカガイ類」、更にその「アカガイ類」に含まれる形で「サルボウ」「マルサルボウ」という語が使用されている(加藤2004)。「マルサルボウ」と同定された理由は、この時参考文献として使用した貝類図鑑の中に、まさに忍澤氏が指摘する「かつての分類」がなされていたもの(吉良1981)が含まれていたからと思われる。従って、筆者が整理した条件下において、深堀遺跡で出土したアカガイ類貝種は、サルボウガイとサトウガイの2種ということになる。

他方、木下氏は南島貝文化の研究の中で、縄文時代から続く二枚貝貝輪の素材のうち、フネガイ科のものとして、アカガイ・サルボウ・クマサルボウ・サトウガイ・ハイガイなどを挙げている(木下1996)。このうちハイガイは比較的小型の貝であり、長門北浦・出雲地方の小児用の貝輪素材として扱われているのみであるため、本稿においては除外するものとする(加藤氏も「アカガイ類」とハイガイを区別して記述を行っている)。関東地方において論考を行った忍澤氏の対象貝種に対しては、

新たに九州を中心に分布するクマサルボウが加わった格好となる。

これら4種のフネガイ科貝類について、忍澤氏作成の表（忍澤 2005）を改変・簡略化する形で、更に他の文献からの情報も加えてまとめた（表3）。表上段の「A」は貝を獲得する際の労力・方法を想定する際に、「B」は形状からの貝種同定の際に、それぞれ重要な要素として捉えられる項目である。

表3 九州に分布するフネガイ科貝類

貝種	A			B	
	生息環境	水深	分布域	形態	放射肋数
サルボウガイ	内湾砂泥底	潮下帯上部から水深20m	東京湾～有明海	箱形	32本前後
クマサルボウ	泥底	5～20m	瀬戸内海、有明海、大村湾		34本前後
サトウガイ	やや外洋砂底	10～50m	房総半島～九州	丸みを帯びた箱形	38本前後
アカガイ	内湾砂泥底	5～50m	北海道南部～九州	後腹隅が張り出した箱形	42本前後

4. 生物学的な補足

上記4種以外のものについて、特にサルボウ属（Scapharca）について補足する。『日本近海産貝類図鑑』（奥谷編 2000）によると、日本には「クイチガイサルボウ」という種が存在する。その名の通り、左右殻の大きさが異なっているようだ。分布域は房総半島から九州の浅い砂泥地とされるため、九州の貝輪を考える上ではこの種も対象とすべきであるが、サルボウガイに近似する（放射肋数は32本前後）ため、その範疇で取り扱われることもあるようである。今のところ厳密な同定要素を把握していないため、本稿においても、本種はサルボウガイ或いはクマサルボウに含んで扱うこととする。

5. 貝輪素材の獲得（死殻の利用）について

立石明氏は実際に市場でアカガイを購入し、環状貝輪製作を実践した（立石 2003）。これは環状貝輪の製作技法を考えることに主眼を置いているため、素材の獲得方法に頓着しなかったことについては、本稿では特に異論を挟むものではない。

しかし近年、貝輪素材としてのフネガイ科貝類については、食料として獲得し、その副産物としての貝殻を利用したのではなく、海浜に打ち上げられた貝（死殻）を利用したとの見解がある。山崎健氏は、渥美半島の海浜における現地探索に加え、貝塚出土資料の中に水磨痕のあるものや他の生物による捕食痕がみられるものがあることから、貝輪素材への死殻利用を確認している（山崎 2006）。

6. 本稿予察として

前述の深堀遺跡の発掘調査において、食後廃棄物としてのフネガイ科貝類は、ハイガイやエガイ類のように成人貝輪には向かないもの以外は殆どみられなかった（註4）。このことから貝輪素材としてのフネガイ科貝殻は、食料として獲得したものの副産物ではなく、そもそも死殻を利用していたことが推定できる。

貝輪素材としてのフネガイ科貝類については、少なくとも深堀遺跡においては死殻を利用していたのではないだろうか（註5）。重複するが、山崎氏の論考を踏まえて以下にその推定の根拠を挙げる。

- ・水磨などの影響により、死殻には最初から殻頂部に穴が開いていることが多い。これにより環状貝輪製作の初手の難作業が軽減される。
- ・フネガイ科製貝輪は、最終的に放射肋すら消滅するほど表面に研磨が施される。死殻に多く残る水磨痕や捕食痕は完成品のクオリティを下げるような要素とはなり得ず、むしろ水磨は表面の研

磨作業を軽減する。

- ・貝種によってはその生息する水深が5 mより深くなるため、生貝を獲得するには潜水等の労力が必要となる。貝輪に適するサイズのものは大型の老成貝と考えられ、それを潜水の際に選択して獲得するのは尚更困難である。
- ・海浜に打ち上げられた死殻であれば、老人子供でも拾い集めることは容易である。大型サイズのみを拾い集めれば足りる。
- ・深堀遺跡の混貝層からは、食後廃棄物としてのフネガイ科貝類資料があまり出土していない。従って、フネガイ科の生貝を食料として積極的に採取していない。

7. フネガイ科死殻の探索

フネガイ科製貝輪の素材については、死殻が利用されていたのではないかと筆者が明確に意識し始めたのは、2008年、深堀遺跡J地区の発掘調査が完了してから実に6年が経過していた。以降、海浜での漂着物拾いの際にはフネガイ科貝殻に注目するようになった。九州島内において、特にこのフネガイ科死殻の探索を主目的とした際、記録をとどめていたものを別表1にまとめた。

8. 南九州地域で得られた資料の検討

初期の探索では、南九州での発見が印象深かった。以下の2地点は、分析対象としている深堀遺跡からはどちらも遠い地域ではあるが、ひとまずはそれぞれについて考察を行った。

(1) 鹿児島県いちき串木野市吹上浜(2008年6月21日)

取り上げにあたっては、前腕に装着する貝輪素材を想定しているため、なるべく大ぶりのものを選んで行った。10分ほど歩き回った結果、計23個の貝を採取することができた。洗浄・乾燥の上、肋数のカウントと長短径の計測を行った。肋数は全て32本前後であり、「サルボウガイ」であることが推定された。長短径については、長崎市深堀遺跡で土壌墓被葬者が装着していた貝輪のサイズと比較す

表4 鹿児島県吹上浜採取の死殻計測表

採取番号	肋数(本)	殻左右	長径(cm)	短径(cm)	状態
吹上-01	32	右	6.9	5.0	虫食い状の歪孔あり
吹上-02	33	右	7.0	5.2	殻頂に小孔あり
吹上-03	33	右	6.7	5.0	虫食い状の歪孔あり
吹上-04	31	右	7.1	5.1	殻頂に小孔あり
吹上-05	31	右	6.8	5.2	虫食い状の歪孔あり、やや摩滅
吹上-06	32	右	7.7	5.4	殻頂~靱帯が破損
吹上-07	33	右	7.6	5.6	腹縁を僅かに破損
吹上-08	33	右	8.0	5.8	
吹上-09	33	右	7.1	5.3	腹縁を僅かに破損
吹上-10	32	左	6.9	5.2	殻頂に小孔あり、虫食い状の歪孔あり
吹上-11	31	左	8.1	6.0	虫食い状の歪孔あり、腹縁を破損、やや摩滅
吹上-12	34	左	7.3	5.6	
吹上-13	31	左	7.4	5.8	殻頂に小孔あり
吹上-14	32	左	7.3	5.4	
吹上-15	34	右	7.0	5.4	
吹上-16	31	左	(7.7)	5.8	腹縁を破損
吹上-17	30	右	7.0	5.2	腹縁を僅かに破損
吹上-18	30	右	7.6	5.5	
吹上-19	33	右	7.3	5.5	虫食い状の歪孔あり
吹上-20	31	左	7.7	5.7	
吹上-21	33	右	7.1	5.2	
吹上-22	33	左	6.4	5.0	殻頂に小孔あり、摩滅
吹上-23	31	右	6.6	5.2	虫食い状の歪孔あり、摩滅
平均	32.04				

ると、採取資料はやや小ぶりとなるが、貝輪として着装し得るサイズのものも含まれていた。

(2) 宮崎県新富町住吉海岸（2008年6月28日）

大振りなもののみを取り上げ、10分ほどで計17個の貝を採取できた。肋数は全て38本前後であり、「サトウガイ」と考えられる。サイズは吹上浜のものよりやや大きく、数値上では貝輪の素材として使えそうである。しかし、貝の歪みが大きいものも含まれており、これも検討を要する問題である。

表5 宮崎県住吉海岸採取の死殻計測表

採取番号	肋数(本)	殻左右	長径(cm)	短径(cm)	状態
住吉-01	39	右	8.0	5.7	
住吉-02	39	左	8.1	5.5	殻頂及び中央部に小孔あり, やや摩滅
住吉-03	39	左	8.5	6.3	やや摩滅
住吉-04	39	左	7.9	5.8	やや摩滅
住吉-05	39	左	7.5	5.3	摩滅
住吉-06	38	右	7.6	5.6	殻頂に大孔あり, やや摩滅
住吉-07	39	左	8.6	5.4	
住吉-08	39	左	7.9	5.4	
住吉-09	39	右	7.6	5.8	やや摩滅
住吉-10	40	左	8.4	5.7	
住吉-11	39	左	7.3	5.2	やや摩滅
住吉-12	39	左	8.0	5.7	
住吉-13	40	左	7.6	5.6	
住吉-14	39	右	7.7	5.9	殻頂に小孔あり, 腹縁を破損, やや摩滅
住吉-15	38	右	9.0	6.2	やや摩滅
住吉-16	40	右	8.6	6.0	やや摩滅
住吉-17	40	左	7.9	5.8	殻頂に小孔あり
平均	39.12				

この南九州での探索は、着想してすぐの頃であったため、深堀遺跡のフネガイ科製貝輪素材は、南九州地域からもたらされたという可能性が十分考えられるのではないかと筆者は思っていた。しかし最近の探索によって、その認識は覆されることになった。

9. 長崎県下における状況の検討

長崎県下における探索では当初、脇岬海岸にて1個体のサトウガイが得られたのみであったが、有明海沿岸や、深堀対岸の香焼島からもフネガイ科死殻を採取することができた。南九州ほど大型のサイズを容易に拾えた訳ではなく、幼貝ばかり採取とはなったが、少なくとも幼貝が見つかるということはこの貝種が生息している環境が近くにあるということが言えよう。

(1) 長崎県雲仙市神代長浜海水浴場（2013年4月16日）

春には潮干狩りが盛んに行われる場所で、大量のカキに混じってアサリの死殻も目立った。少ないながらもフネガイ科の幼貝が混じっており、1点だけ大型と呼べるものも採取できた。採取したのは全

表6 長崎県神代長浜海岸採取の死殻計測表

採取番号	肋数(本)	殻左右	長径(cm)	短径(cm)	状態
神代-01	34	右	7.0	5.7	腹縁を破損(長径)
神代-02	34	左	5.0	3.3	
神代-03	32	左	4.5	3.0	殻頂部に小孔あり
神代-04	36	左	4.7	3.2	腹縁を破損(長径), 殻頂部に孔あり, やや摩滅
神代-05	34	左	4.1	3.1	
神代-06	35	右	4.0	2.9	腹縁を破損(長径)
神代-07	33	左	4.0	2.8	腹縁を破損(短径), 殻頂部に小孔あり, やや摩滅
神代-08	31	右	3.5	2.6	腹縁を破損(長径)
神代-09	32	右	3.8	2.7	腹縁を破損(短径), やや摩滅
平均	33.44				

部で9点，放射肋数は33本前後であるため，「サルボウガイ」或いは「クマサルボウ」と考えられる。

有明海は赤貝の産地として知られているが，現在「赤貝」として流通しているものは，実は「サルボウガイ」や「サトウガイ」であることが殆どである。対岸にあたる佐賀県鹿島市の道の駅等で販売されている「赤貝」も，放射肋数が筆者のカウントで30本台であるが，今回採取できたような幼貝サイズのもので殆どである。

(2) 長崎県長崎市香焼島辰ノ口 (2013年4月17日)

伊王島を臨む，規模の小さな砂浜であったが，打ち上がり物は多かった。付近の岩盤は砂岩・礫岩で形成されている。ここでは，幼貝のみではあったが，5点のフネガイ科死殻を採取した。放射肋数は33本前後であるため，「サルボウガイ」或いは「クマサルボウ」と考えられる。

表7 長崎県香焼島辰ノ口採取の死殻計測表

採取番号	肋数(本)	殻左右	長径(cm)	短径(cm)	状態
香焼-01	33	右	3.8	2.5	
香焼-02	34	右	3.7	2.7	
香焼-03	31	右	3.2	2.4	
香焼-04	34	右	3.0	2.2	腹縁を破損
香焼-05	32	右	2.9	2.0	
平均	32.80				

10. 探索結果の考察

南九州での探索において老成の大型死殻が多く見つかった理由は，恐らく海浜を取り巻く環境が太古からそれほど変わっていないからであろう。吹上浜も住吉海岸も，外洋に面して大規模な砂浜を形成しているのに対し，リアス式海岸を持つ長崎県沿岸では，護岸化・埋め立て等，環境への人為的働きかけの影響が大きいのだと思われる。もちろん，往時の環境とは気候・海流等も異なるであろうから，結果をそのまま捉えることはできないにしても，一定の傾向を示すものとして考えたい。

11. 深堀遺跡出土資料の検討及び結果

2013年4月，深堀遺跡報告資料の保管場所にて，現物を実見する機会をいただいた。貝輪資料は他施設にて分散展示されているため，手にとって見る事ができたのは一部であったが，結果として非常に興味深いことが分かった。

検討作業は，出土した貝輪の放射肋数をカウントできるかどうかを鍵となった。各貝輪は表面の研磨が顕著であったため，放射肋数をカウントすることはなかなか難しかったが，現生標本も見比べたり，内面に残る放射肋も参考にしたりしながら作業を進めた。その結果，土壌墓被葬者が装着していた貝輪の放射肋数はおよそ32本前後，混貝層から出土した未製品1点は40本であり(註6)，それぞれサルボウガイ・サトウガイと推定した。

表8 深堀遺跡出土貝輪計測表

遺物番号	肋数(本)	殻左右	長径(cm)	短径(cm)	状態
図2-13	33?	右	7.8	6.0	研磨顕著
図2-16	33?	右	7.0	6.2	研磨顕著，虫食い状の歪孔あり
図2-17	33?	右	8.5	6.6	研磨顕著，虫食い状の歪孔あり
図2-18	31?	右	8.2	6.2	研磨顕著，虫食い状の歪孔あり
図2-19	32?	右	8.1	6.4	研磨顕著，虫食い状の歪孔あり
図2-20	31?	右	8.0	6.4	研磨顕著
図3-25	33?	左	8.3	5.9	虫食い状歪孔あり
図3-29	32?	右	7.1	5.6	研磨顕著，虫食い状の歪孔あり
図4-30	40	右	7.4	6.2	水磨・研磨なし，殻頂部に大孔

サルボウガイは、深堀対岸の地である香焼島にて採取されている。香焼島には砂岩の露頭も認められるが、この砂岩が深堀遺跡で検出された石棺墓の石材として使用された蓋然性が高く、葬送儀礼に関わる2つの事柄が同じ香焼島に由来する可能性がある点は注目される。またサトウガイは、脇岬海岸での探索で見つっている。つまり、深堀遺跡で出土した貝輪は、野母崎を含んだ長崎半島西岸地域で、その素材獲得が十分可能であるとも言える結果である。

また、製品8点中、他の生物による捕食痕が認められたものが6点見つかった。山崎氏の論考と一致するものであり、死殻を利用していたであろうことが確実であると言える。

12. 小 結

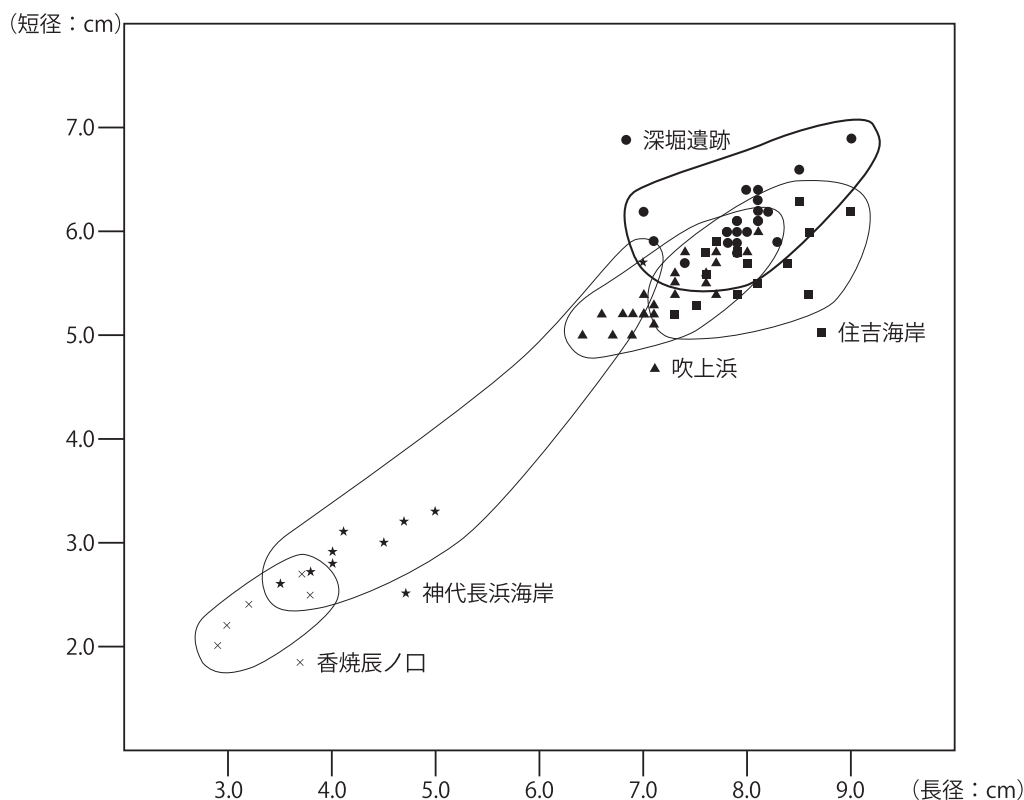
深堀遺跡で使用された「フネガイ科製貝輪」の素材は、遺跡が位置する角力灘に面した海浜で獲得された可能性が高い。そのことで、「フネガイ科貝類」がこれまで「在来種」として扱われてきたことが、文字通りのこととして追認されたとも言える。

また、深堀遺跡では、食用となるにも関わらず、フネガイ科貝類が食料として利用された痕跡が認められない。このことからフネガイ科貝類は「貝輪素材」という特別な目的をもって遺跡にもたらされたと考えられ、食糧となる他の貝類とは別な方法、つまりは打ち上げられた老成貝の死殻を採取したことが推定される。

13. 出土資料と現生資料とのサイズ比較

本稿で言う「貝輪」は、実際に手首付近に装着するものを想定している。装着するためには拳を通さなければならないため、ある程度の大きさであることが必要となる。そこで、深堀遺跡の2基の土壙墓から出土した貝輪のサイズを基準にして、探索で得られた死殻の計測値を比較してみた。

第6図から、深堀遺跡出土資料群が最も右上、すなわち長径・短径ともに大きいことが分かる。つ



第6図 出土貝輪と採取死殻のサイズ比較

まり、比較的大型サイズを採取できたと感じた南九州の死殻ですら、着装可能サイズに及ばないものが多く含まれているのである。

この比較からは多くのことは言えないが、着装できる貝輪素材はかなりの大型老成個体であり、打ち上げられた死殻とは言え、ある程度の稀少性が感じられる。

14. まとめ

深堀遺跡の被葬者が着装していた貝輪の素材は、元々貝輪製作のために遺跡にもたらされたもので、生貝ではなく死殻であった可能性が高い。

フネガイ科貝類を「在来種」として扱うことは、少なくとも深堀遺跡においては、探索結果からも妥当と言える。

成人が着装可能なサイズの貝輪素材、すなわち老成した大型個体の死殻を獲得することは、少なくとも現代では簡単ではない。往時も比較的稀少であったことが予想される。

15. 今後求められる視点

フネガイ科製貝輪についての研究を深めるために、今後必要とされることは何か。筆者は大きく3つのテーマで捉えるべきと考える。

(1) 貝輪素材の貝種同定及び産地推定

表2に示した西北九州でのフネガイ科製貝輪出土地もまた、角力灘を囲むように立地していることは示唆的である。しかしながら、各遺跡での貝輪素材がフネガイ科のどの種であるのかの確認作業は、依然として基礎的必須の事項と捉えるべきである。

五島市（旧富江町）所在の宮下貝塚で出土したサルボウガイ製貝輪について、「サルボウガイは内湾の砂泥性の海浜に棲息する貝類で、本遺跡の周辺にその産地を求めることは困難であるとの指摘を受けた。」（川道他 1998）とあるように、他遺跡においても同定される種によっては、やはりその由来が問題となるのである。

出土資料であっても表面研磨の少ないものや未製品であれば、放射肋数をカウントできる余地がある。また、食糧と密接に関連する貝層からの出土のものとの比較も、奨励されるべき有意な作業であると言えよう。

(2) 左右殻の使い分け

南海産貝輪、特にゴホウラやイモガイについては、男女装着の別、左右腕装着の別について、何かしらの意味づけがあったことは知られている。しかし、今回紹介したような深堀遺跡における左右殻の装着分けがあった事例はあまり知られていない。比較的左右の区別が難しいタマキガイ科製貝輪とは、この意味合いにおいて一度区別されるべきである。或いは深堀遺跡第11号土壌墓例のように、左右性の強いフネガイ科とそれが弱いタマキガイ科の併用についても、何らかの法則性がないか検討を要する。

表2に示した過去の事例では、左右殻の別についてはおろかタマキガイ科との区別記載すらあまり留意されておらず、上記のことについて判然としない。それらの記録及び資料の確認が可能であるならば、是非とも再検討したい事柄である。

(3) 赤い血の意味について

フネガイ科及びタマキガイ科貝類については、ヘモグロビンを含む「赤い血」をもつことから、「呪物」として扱われたという考え方がある（白井 1997）。しかし、死殻を利用したのであれば、赤い血を根拠とした「貝輪素材の選択性」や「貝輪の持つ意味」に関する議論を見直す必要があるとの意見もある（山崎 2006）。

九州近辺での弥生時代においては、これらの貝輪の使用が西北九州に限られているが、縄文時代も含めると全国的に出土している。これが「呪物」という共通項から来るのか、それとももっと必然的な理由（地理・労力・稀少性）によるものなのか、再度注目していく必要があるように思われる。

別表1 筆者による海岸探索記録

番号	場所	年月日	天候等	フネガイ科	その他
1	鹿児島県いちき串木野市吹上浜	080621	梅雨中の雨天日		マクラガイ類他
2	宮崎県新富町住吉海岸	080628	梅雨中の大雨翌日		ツメタガイ類他
3	宮崎県宮崎市白浜海岸	080628		×	アサリ?
4	鹿児島県鹿児島市前之浜	080629	梅雨中の快晴日	×	アオイガイ類他
5	長崎県長崎市深堀漁港脇	080720	快晴	×	マツバガサ他
6	長崎県長崎市神の島付近	080720		×	カキ・サザエ他
7	長崎県長崎市蚊焼漁港	080817	曇り	×	カキ・フジツボ他
8	長崎県長崎市脇岬海岸	080817		1	
9	長崎県長崎市川原海岸	080817		×	
10	長崎県長崎市為石海岸	080817		×	アワビ
11	長崎県大村湾南沿岸	090124		×	ぼぼ護岸化
12	長崎県西海市柳の浜	090124	曇りのち大雪	×	大雪で断念
13	長崎県西海市雪浦海岸	090124		×	タマキガイ科他
14	長崎県長崎市大野海岸	090124		×	大型円礫のみ
15	長崎県松浦市ぎぎが浜	130409	波浪警報翌日の晴天日	×	エガイ類・ウニ類
16	長崎県長崎市深堀漁港脇	130415	快晴	×	カキ・クボガイ他
17	長崎県諫早市結の浜	130416	曇り	×	
18	長崎県雲仙市千々石海岸	130416		×	コウイカ・?貝
19	長崎県雲仙市土黒丁	130416		×	カキ・アサリ
20	長崎県雲仙市神代長浜	130416			カキ・ハイガイ他
21	長崎県長崎市香焼栗浦	130417		×	クマノコガイ・クボガイ
22	長崎県長崎市香焼辰ノ口	130417	快晴		クボガイ・イタボガキ
23	長崎県長崎市伊王島	130417			クボガイ・イタボガキ

【註】

註1 「長崎新聞」にも記事が掲載された(写真1)。この年度の発掘調査では、他にも目を見張るような成果が数々挙がり、筆者自身も従事できた喜びにただ興奮するばかりであったことを記憶している。新聞記事は切り抜きコピーをPDF保存していたのみで、掲載年月日は記録していなかった。

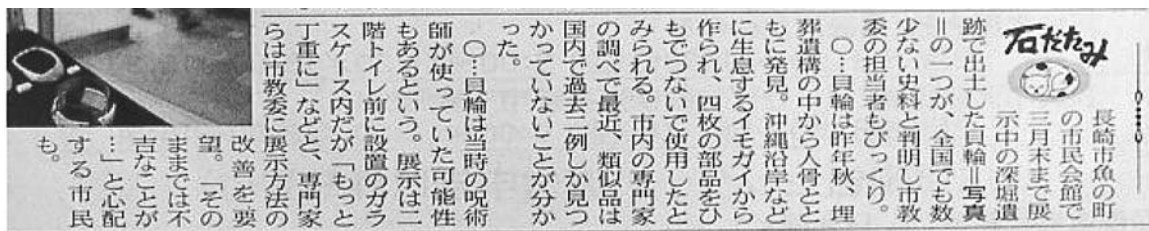


写真1 長崎新聞に掲載されたコラム

註2 『深堀遺跡』『まとめと考察』において、フネガイ科製貝輪の左右殻について論じたが、後になって図鑑（奥谷 2006）で再確認したところ、両者において殻の左右の取り扱いが生物学的に逆であることが判明した。本稿では図鑑に倣って統一して扱っている。

- 註3 土壌墓人骨の年代測定の結果、第10号は2262±34年、第11号土は2365±33年であった（いずれも肋骨を試料とする）。測定・報告者は、東京大学大学院新領域創成科学研究科米田謙氏（当時）である。
- 註4 『深堀遺跡』種名表によると、フネガイ科として、クマサカヤドリエガイ・カリガネエガイ・サルボウガイ・マルサルボウ・ヒョウブガイ?・ハイガイの6種が種同定されている。
- 註5 筆者は民間の発掘調査会社に所属する調査員であるため、居所も定めず各地の遺跡現場へ赴任する日々を送っている。そんな筆者の趣味は、貝殻を含めた漂着物拾いや海釣りなど海浜に関連するものが多く、振り返ってみれば自分でも驚くほど多くの海浜（特に赴任することの多い九州・沖縄地域）を訪れていた。本稿着想以前にも、砂浜などに打ち上げられたフネガイ科死殻を目にすることはあったが、その場合、殻頂部を欠損するものばかりという記憶が強く残っていた。前述の立石氏の論考にて、まず貝殻中央に穿孔するという行為が思いのほか難作業であるという知見を得、やはり貝輪素材に死殻を利用していた可能性を強く感じたのである。
- 註6 放射肋数については、実は正式な数え方を知らないため、筆者によるカウントでは、両端の分だけ最大2本多く数えている可能性がある。

【引用・参考文献】

- 阿部常樹他 2004 『深堀遺跡 - 長崎市深堀5丁目地内下水道敷設事業並びに深堀第一排水区雨水梁敷設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎市教育委員会
- 大野安生他 1995 『富の原遺跡・小佐古石棺墓群B地点II』大村市文化財調査報告第19集 大村市教育委員会
- 奥谷喬司編著 2000 『日本近海産貝類図鑑』 東海大学出版会
- 奥谷喬司 2006 『日本の貝2』フィールドベスト図鑑19 株式会社学習研究社
- 忍澤成規 2005 「貝輪素材として選択された貝種の流行と背景 - フネガイ科製の貝輪素材の分析を中心として - 」『動物考古学』第22号
- 加藤久雄他 2004 「深堀遺跡における貝層資料及び動物遺存体について」『深堀遺跡』長崎市教育委員会
- 川道 寛他 1998 『宮下貝塚』富江町文化財調査報告書第1集 富江町教育委員会
- 木下尚子 1996 『南島貝文化の研究 - 貝の道の考古学 - 』法政大学出版局
- 吉良哲明 1981 『原色日本貝類図鑑』保育社
- 久保弘文他 1995 『沖縄の海の貝・陸の貝』沖縄出版
- 酒詰仲男他 1964 『五島遺跡調査報告』長崎県文化財調査報告書第2集 長崎県教育委員会
- 白井祥平 1997 『もの与人間の文化史83 - I 貝I』法政大学出版局
- 鈴木公雄 1989 『貝塚の考古学』東京大学出版会
- 立石 明 2003 「はじめてのアカガイ貝輪づくり - 但し現代の道具を用いて - 」『史紋』第1号 史紋編集委員会
- 福田一志他 1998 『大浜遺跡』長崎県文化財調査報告書第141集 長崎県教育委員会
- 山崎 健 2006 「渥美半島における貝輪素材の獲得」『考古学ジャーナル』541

【お詫び】 本稿は平成24年（2012年）には既に投稿いただいていた。刊行が大幅に遅れたことを心よりお詫びする。著者によると刊行遅延による論旨の変更などは無いとのことである。（事務局）